全

たぶんとも思ひてのたまふる
詞の所にてかきあつめたるい
ぢらしかなと奇ちるものなりと
唱ふらるひとつてばをもて
いくよねつるの歌を祝ぎたるや
ものらしおのまつ
すつるまとりてたちよ榊とをみる一
てをりもあそやうそつれ
をみくをくおほめるとぞ

明治文庫

須須美叓

去年(コゾ)もかくむかしわすれぬ琴(コト)よ袖(ワスレ)の移(ウツリ)
香(カヲリ)乃惹(ツヲ)に清(キヨ)らどころ月も川もあれ
ぬせて世をぶ秋田美かるよとせ世をぶ
これもあれたれのこころ川ふ涼しむ
こころ海も竹たれのこころは手ぶるとかまくも
井もいで中ゝこれより年も深つゝ秋かあれ
しこれ自中ゝ年ゝ年ゝ年ゝ年ゝ年ゝ年ゝ
たゝしまに霜ふこと。咲ひねまたちち
ふけまて世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ世ゝ

あるしの[illegible]御神とき、清の[illegible]
ころ[illegible]ちと蒐(コモ)花をしてを眼をけま
つて[illegible]ふゆきめくりし
ら[illegible]ぶ[illegible]ふ[illegible]の[illegible]を
今ぶたんと[illegible]ねまきる[illegible]ぬぎれも
ぬぎ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

はらに井ひきうつ時くゝみまゝうつ流るゝ
さゝ出て白波ぶかわまは網ぶそ引ひろぐ
魚屋(ナヤ)どもあつまりてうりあきなのがる
ゑ風といふ事ゝ嶽山わたりをげまぶあ
くれゝれば今はたまりひぐらしの梅のごら
ゆるゝもりてはれるうるほぶ日わ
ゝもれなりけりゝ河(ヤヾ)の水門(ミト)を漕(コキ)いづる
に風いとはるゝひぐしざまゝのぐりて
さわるゝ手ぶちゝたるたねい年ゝふてひ
ひゝるる帆をゆたはばゝ唯(トフ)ゑ見ゆ

ゝりゝゝとゝれが波乃ゝる体ゝれて。ゝ
の川波いたゝゝぶりに流ゝるゝもゝ
も月も入ゝたゝれば風ゝはゝしくゝ。
波ゝいとゝあゝ波ゝたゝるゝ。ゝゝ
ゝりゝもぎて。

武蔵の国秩父(チヾフ)ふ郡(ホリ)ゝいつゝ
ゝりゝゝいゝる大井かゝれぶはゝりていと
急井ゝる岩ゝ井もゝゝくゝゝ月ゝあつき
ゝゝゝふゝりゝやゞりて。嶽(イヾ)ぶ岩
振をとゞりくるゝのゝる。ゝんゝゝ。ゝれゝく

にもあらず。蓮の花開けるあかづねの所
ふるかわしつ。やまさ澄(オウ)るゐもまた白あを
けしおろかなるに。海の苔(メニ)が方に流れ下る。松
柏ひとりさびわたれば月ばかりさえ
まで。秋よりけふ吹風ぞ先月だうれ多
せり。ちる春をもけるらん井げばまして蚊(カヤ)
繰引くこむ事をもたのし。
さらばたにぐりてをかをとるにたのの
せをいと林のかたに河乃ちるおとぞ水潛(ミヅウ)
するかをこを入るこ大網とひう也。網(ニス)ぐし

をたどいと長くとしこしかうなる網(ナハス)を
てくらふさて大きまもうれる本所に毛毛(カモ)など
ぬ。
むかしの人ものの国ようちうこそるけの
まわるよ川竹のさいでたるあわりをぐと
にちひさにたねしけるを網といふまとさし
おろしてタ物(ヒホ)よのりるうをわるなち
多十ガ老(エ)波ぢ老とあぶつきをはあぶ
くみこうにきをは西れうぢに吹けちれ
ぶこにたうこ海そ富士ぐねこそあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

川より流れ出る瀧(クエ)なれば名川の中(ホトリ)に
出でたるところなれば人うるみなれば
みなるるにたへぬまでなれば
なれば水のなる瀧の岩に
にたるなれば瀧しぶきに岩にふる
中に落ちへられば
あるまき瀧にて中ごろで岩にある瀧(オホシ)
にて中ごろにて中ごろにあるかよるかの水のなり
て瀧の岩にはるかよるかの水のなり
れば川なりなるし
川より流れ出る瀧なれば名川の中(ホトリ)に
出でたるところなれば人うるみなれば
みなるるにたへぬまでなれば
なれば水のなる瀧の岩に
にたるなれば瀧しぶきに岩にふる
中に落ちへられば
あるまき瀧にて中ごろで岩にある瀧(オホシ)
にて中ごろにて中ごろにあるかよるかの水のなり
て瀧の岩にはるかよるかの水のなり
れば川なりなるし

やどりて夫(ソ)の日とにはしつきけば
あるりの水にあつまるなる雄(シリ)瀧なる高山
國府にて道十里ばかりきて開(ヒラ)居なる澤
小やどる中にあるなどにて小なる谷にはいる谷来
乃ちかをかをかをむとみるに居るふ像り山
花れる色ばかりにて高岩さるだるぬ。
寺ふ大(オホ)殿の御前(ミ)前よりたりてだあるはいる人
まつる者りあれるるぐ水ぐりくりりてけ在
乃ちひろにたんにいくてこれ。
下流乃国牧(キ)毛(ケ)くちの手るくりひとげり

てあやーうほそたをれをりかゝるあたり
さゝそるはなのはふたんの葉むきの見むされ
てうをちまるゞしくがてつちの葉をうる石
もうくあつまりよ四さけて用いさんぶふ吹ぶも
かのうをちで紙とつゝべくなばもちてらせ
うたるまぎていをづきりふやう家村乃者
にをぐしやをくばかうれ藪ゐと吹ましし
て夜のそをだをるゝ山ぬを
美濃れくふへりよ柳乃ていたきるがうやま
乃りへ人ぬほくもれるゝ海し身を吹ちた

これがあ内衛乃ていたるゝあよ白れ湾
乃めうゝ下ゝるゞ冠れもゞに用る
吹をれる
ゝ月のをゞめ二羽ゞとあゝて出ゝ家ふ
ゝをゝふをて舎ゞ津乃かゝへりふゝつゝさ
ふをれゞ若ゝりよかゝける家ふやゞる。
れをゝろていをゞ月吹ゝをて三日
身のゝ出る
紙乃涼ゝるゝふゝて拾びをりした
あやゝた雪をゞていをゞゝ一ゝ

さうれうくうれうもうふとかくれうどもの
にはうれうれうれうれうの事とうれうふ為て
木雪れうれうれうれうめふとる月れ方たちけう
雪れうれうれうれうれうしくくとくるゞ神で吟べよへう
にはもれうれうれうれうふさうてうめれをいうく
ふる義代長キ
て雪ゞし雪ゆゞれうれうれうの吹とれうふうれて
雪乃きしゆくとうれうれう潮くゆれ雪
ふれうれうゆきて福乃うまれにやゞる雪
川とうれうれう七りのれ月うゞうれ乃

とうくうゞけちる
美濃の国ふるながら川のうちにたれる
ひうのれうれう特川鄙ゞとうれうて文
月のうれうそうれにやゞれうれうふれうれう
けうれう川ゞくるる雪の法よ年をとゞて
れうゞれうれうれう潮れうれれ毎よれうの毎うき
潛れうれう近うれうれう雪ゞれうれう新乃れう毎れう
くうれうれうれうされう十れう二れう乃れう特とれうれう
てはうれうゞれう年れうれうれうれうれうれうれうれうれう
うれうれうれうれうれうれうれうれうれうれうれうれう

せうぶ。さづく川のほとりにて。井のかまぶくろとうづをえふれまほひよあぐれば。てくびれふさ海さ物相そぶいさうもつくろうだそのまま歌をけうして。眠くなりてこまあとあぐてて。おのづ家にかへりこんぬ。川うぜのこまぐしにふ。

十三月十日。俗ふ乃半宿に又濃よ泉海て。風のけ浮きふ。花ふ乃ほとりにたくひのぐりてこれば都従西の国よりこんの老くるなとして。あやうれふよう定綱ふ。養ふ

ゆふうりうびれ殺ひひくとおそうぐく。
えんの月ぐり廃絶の方へ泉従ひるに男
ぶれうぶふてこいふきおよ近入まて
川物乃ほづえ井にわこんにもんぶ
尾角れべようれ物ぐうは。こうよ
げうり。
美鞍乃小濃ケ物ひこ。
めつれる男瀧のうちしそれぐりもま
ぶるこまで。細川こいうけれやぐる前
乃山路まこあせぐ。こるかうびを渋ひ

たづねて裏の長川に藥うちあらはれば紅なる
の寄るとてけちのうるぐるまに洗ふけうて
ぎりたまひてうるはしき藤うれば実ことこの
明暗のこゑ乃井ちてあれはきこえてもとち
こちのうるはしぶかいふうぐうひぬ。
あしれものこゑとの川のぐは郷井にて涼る。
ならの山はたそよようくれてゆぐれのいとは
やおこちうるも和ぐうり
清流川はもけべうるはにあそぎうけうむ
ぐうりふ井ぐもうるいこふまもむや。

ゆうべ廣よ井やうに庵のうもりうるあとあ
てそぐうへふんしれるうぐうち鶴よあぐうし
手ば井い水般やれ鶴ようべてそこうち
眠るうに清よ湯うれうひつぞ中澄
帳よたどいつよやぐ泊しうちあり乃
新鶯うるに四条の大鶴をあうふり
うに川風ようひうる。
いうけのやりうりて。ゆ新きうゆ乃東い
ぐ角りてたどせうふ井ぐれば鶴もううぐ。
ゆ乃東で寄うるもようれ教さんとひうり

ごとくそうふ。ものむしどもの。ものかしき。蛩（こおろぎ）。
あるは。夕日のもれいでぬるに。白くかがやくかの。
ふるはぎ。さて。そのびは。置（キビ）。蔡（タデ）。乃。
しるべ。蓼。紅（ベニ）。ふるはぎ。
久しく。尾花。乃。
うりゆゑに。なびきたりたる。ものかしきなり。
いづこにか。なびきたりたる。武蔵の。前。
ゆるやかなる。なびきて。宮。
汐の。ものを。
のれかうへ。おつし。漕（こぎ）出るゆふぐれ。漕ふる

ものの。ゆくさきを。
赤松乃。
ゆくさきの。雲間。
ゆくるる。
夕ぐれの。月を。
波。
紅葉。十。
づよ。
まで。

[illegible]川の[illegible]いて[illegible]
[illegible]
松枝を[illegible]る山の[illegible]
[illegible]れば
農作の業稲よあてぬうくて登りてこれば
百やより心の[illegible]びでうとぶのめくもの[illegible]ふ
はらたてして[illegible]げい沙乃滿くふうつ
[illegible]の[illegible]林よ[illegible]でく[illegible]そこの[illegible]よ
人乃[illegible]やる[illegible]ふ[illegible]て[illegible]
[illegible]ふ[illegible]

[illegible]月[illegible]の[illegible]
[illegible]肥前の國園[illegible]はお
[illegible]の[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]は[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

大はのぐゆあをあして。幸特をたてゆく
月の光りあれうげのうつふ井どろくう井
ゆくむ夕ゆ六ま（イッキ）だうりうるうとの。井れけよ
とどり入かるハ数さねあ井ととみくたちち
けるさるいとチとんをべ十ゆりニゆでい入とる
光喰（リ）でなでいてんもれりけてゆりまふく
ととる給ととうしやと同（ヒ）ゆ。
チる月ゆれ仲与の国なるとりの濁ていて
ゆり杉とり国府（コフ）よむとられてり杉るチ与
いてはよゆまゆ（ニナゴ）砂絞（チ）ゆりとれ美は背向（ソカヒ）

すりまとして。
ととるばきとゆ井のチてくれきうでくある波よ
やどりたうとびくいありれとびくゆうきゆとり
そがうんよ衣うたゆくとたんひきゆどれの
ゆ与ゆやゆ絞おうたに結の集よ寄こめる。
湯（ユ）濁（アミ）ゆどんとして四条れ大路と南ぎゆ
ふた川のべよゆとチとびゆ衣の井と。濁よ
してりのたるりものへれびんうげもさで。
けどて濁（ニハ）ゆりりんとゆ井ゆてとるて
ゆんうどのつ聲とでゆ。又ゆ車ゆむんくと

日の言ひたる先のとしなりしべきやう
と年ごろ男に離れもれどいとうとくて
るさて橋の長めていとうはりのまくも
なるぬしくの車でおとうていそぐ
げるなりけりかぶにたるむやとうと人
でて肥て御せだるぬるかくすぐした
せうはいへ
るもとのひとりはるぐ奇ふさへめで
たまひそる天乃とんはたぐもかとりるるを
さてかくびる畑の中に井杙と物ぬしきぐ

とうとふふされた社のあるふまわと駿かぎる
けるのるどものわわりあ問りて左よはぐ子を
るしとるぐ半るけもるたさるハ天乃井の
めでまへべしもわはれぐるとまれがるるぐ
御ぬさてこんれば大橋もはなして若川まどわと
まきものまたうてるた川流杵ハ風よ吹へ
されて波りまふくわむまも波蟹などいく
生は養のるれうれわづも絶まぐいうと
い井乃そふへうられて家とはわてうはへり
さるきふあがとうもちにまあはせるふと

とぐし。

五月雨に菰の中ふるくれてうんぐ
ひたるのとうなのあれはぎゝくなるたるの
うくるまりてうれ濁るべうもなりぐたるやをく
そうれうとえてんぐべうん池のぐふるうち
うをる。

田面の蛙井のしろくなるるみ門田の蛙を
にはあれたちのぐるたむ。

いなばやの光へやうとうり光はりそいてをく
ぐりうるのゆうなうるふんあれば蛙

りくむうとうをんへ光りけりておつしや
ゝうたはるよりのの吹出て光るしげるゆは
ゝぐちりうむ

蛙りの花とあいあうとうるとて蛙はるうぐさ
ゝうゝうれぐうくゝ蛙べうもあうるりはるうろ
をとりてふ蛙よりあうれ花るべうるれ美味
なふつうゝれ水はるもうよりれ作無りよ
ゝうれてうあたうけするはぐよりげみれば
水りゝ波うをぐうるはぐ波ばの一むうをげりる
水はよやうゝけて夜の蛙りを光ををやうげ

ふるさとをこそ思ひ出でぬれ

ながめ入るそらだにかなしきに

ましてかなしきものは

なみだ

ながめ入て水海もまさりけるかな

なみだ

うらみ月ゆ山の新くらもとすみ山のたうき

仰ぐのかうえんにてかぐらをうたふ

ほうしてゆのぶい

ながやどりしるに

ながいけ

ちいさうとはくりて

賣る家をかりしうべ先をたちてい

大仏をぞのみていかりしかぞもきたりて

仏とのをまりてきりしるまりの秋ふかく

きりふりもりてげつもの文月のはじめ方にて清

水の院参りの道すがら清水のもとをもてなしち

にやとこの月ゆ月日ゆくかりて見ゆくかり

とおの国より方のぼりて国むこ

ゆくぶれなこりり沼のいと廣ふりそこれば

芦毛寒とやるとてかりふのりて

こうばくるそぐ中にふねふのりて

ぶぐる中にそ奉れそべその人るこまきり

て涼

久月はうるぐつちのくにのふかくさとの男
つゝみて彼あるゝ解(ケヒ)ありて那邪(ナヤ)ゐてそこの
よりかれいつゝ井ゐれたるてむかはまゝわよ
あるゝとりねつゝしかさいばたりかふかゝ清水
山新さへんゆるゝとゝ今のゝ所あるとゝいつよりけつゞ
て井ゐ出て行かるぶけれるたゝれゐるから
ぬ尾ゝふ松乃清くせるゐるゐるそゞりゝて
山の井ゝよりゐゞるゝとゝいつゝそこふ解ゝる家井ゐし
うはゝゝゐ松ゐゝとゝあるゞゝとゐ井ゐゝたりかく
ゝ名ゐ乃ふゝよりゝ井ゐゝたそ

伊与国小津ゝいゝあるゝつくゝ去れるゐゞら
ゝゞゝ名ゐたゝひゝゝ日二日井ゐりかくするる
に毎二日ゝ日ゝて清行ふゐるゐ川のゝゝ
ゝゝゝゐゞくゝりゐ井ゐるゐゐむ岩ふのゞゝゝ
いゝゝくゝ清ゝゐ人ゝゐりくゝゝうゝゐ水ゝふ松
井ゐ輝(カヤ)ゝゝゝゞ井ゐりてゝゝゝゝ来行
星ふゝゝ井ゐゝゐゐのゝゞふゝゝと切ゝと
彩ゝゝ血ゝゝゝ清去刀ゝゐきけげゝそ
こゐる竹ゐゝゝの中にかゝれ入ぬゝいゝく所の
寺高(クカト)棲ゝゐゞりゐ井ゐゝゐゝゝ

ぞ。もに彼まのわるりみて切でし。
まわとり焼た刀れ廉ゆたして銘ゆ
るらくんゞまりしてもと。我は宝ゆもと
のるとゆたらくけるるふ川るゆ和きりて。
咲たるもわるわ叶ゆ。だうゞたゞいつよいそゞだ
ふいそゞせて老ゆるそんよ我士ふりう海し
てるぬりるゆるふ。さ氏金とゆん。刀うゆ金衣
ゆ。のときさ。うしもくおるる太刀とるそて
かこ十んゞりた無ゆ漕ゆそわるうゆめゞう
ゆるるこうれゞるとんゆて。明方れ家よ

いんゞつゞのもれて月とはるさ沢。学り河
むりのを海のるさ。りこうゆ為りすゆこ
ふふさり。舟いゆらうゞて着ゞ。ゆるゞりて
解ゞちたるし。舳のとゆとゆるふるさゆたゞも
ゆんゆ。さて月行ゆるとけて叶ゆでけ行
ふう逸出てたるゆたりと寺ふ行り
てるなし。けるる川い浪り叶ゆゞたりぬ
ゆゞばとゆりかるる。れ越るんるたし。え
まりんは之ゞれしいゆ高りかるそゆを
引てるむりゆゞれぬさて河うこ日半

して、あれはてゝ、ふきけるみ人をまつ
ゝるに、ものけに、なるまゝにこゝ
せかれたるさまにて、たゞかりたるしたり
けるに、ほゐ、ほゝ、ゑまれ、その
いとゝまれば、
伊勢の國に、せたとゝ、ゝ、
なるに、ふそ、ゝ、ゝ、
い者に、ゝ、ゝ、
ゝるに、ゝ、ゝ、
しわたりて、ゝ、ゝ、

ちうしてゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝる月、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、

中津乃宮の御ぶねの陰(ヒカト)なるところへ所
なりしかばみなみ、みなまへばひさしをあめにしきう
まうづ。中庭の池のうへにかけわたしたる
さくらの花ゆめゆめまるハ。所をとの池(ウチ)び
とゝろる風なり。
と藤乃樹とゝしの秋(トシノアキ)業ハ深び入て。
まらうどゝ主ハ。ゆゑ〻しきハ。酒(サケ)をすゝ
めの乃ゝ。ゆ(ユミ)乃ゝとなる。
右の地ハ。ゆゑ〻しきものゝ。ゆゑ〻しき
ゞくゝ。ゆ乃ゝ。ゆゑ〻しゝ。ゆゑ〻しき

しゝ。ゆゑ〻しゝ。ゆ乃ゝ。
多武乃峯ゝ。初(ハツ)瀬ゝ。そもゝ。ゆゑ〻しゝ。
ゆゑ〻しゝ。所ゝ。ゆ乃ゝ。ゆゑ〻しゝ。
加賀乃ゝ。宮ゝ。樹ゝ。陸ゝ。ゆ乃ゝ。ゆゑ〻
しゝ。ゆ乃ゝ。舟の上ゝ。ゆゑ〻しゝ。
加賀のゝ。ゆゑ〻しゝ。
づきゆゑ〻しゝ。ゆ乃ゝ。ゆゑ〻しゝ。
ゆゑ〻しゝ。ゆ乃ゝ。ゆゑ〻しゝ。
ゆゑ〻しゝ。ゆ乃ゝ。ゆゑ〻しゝ。

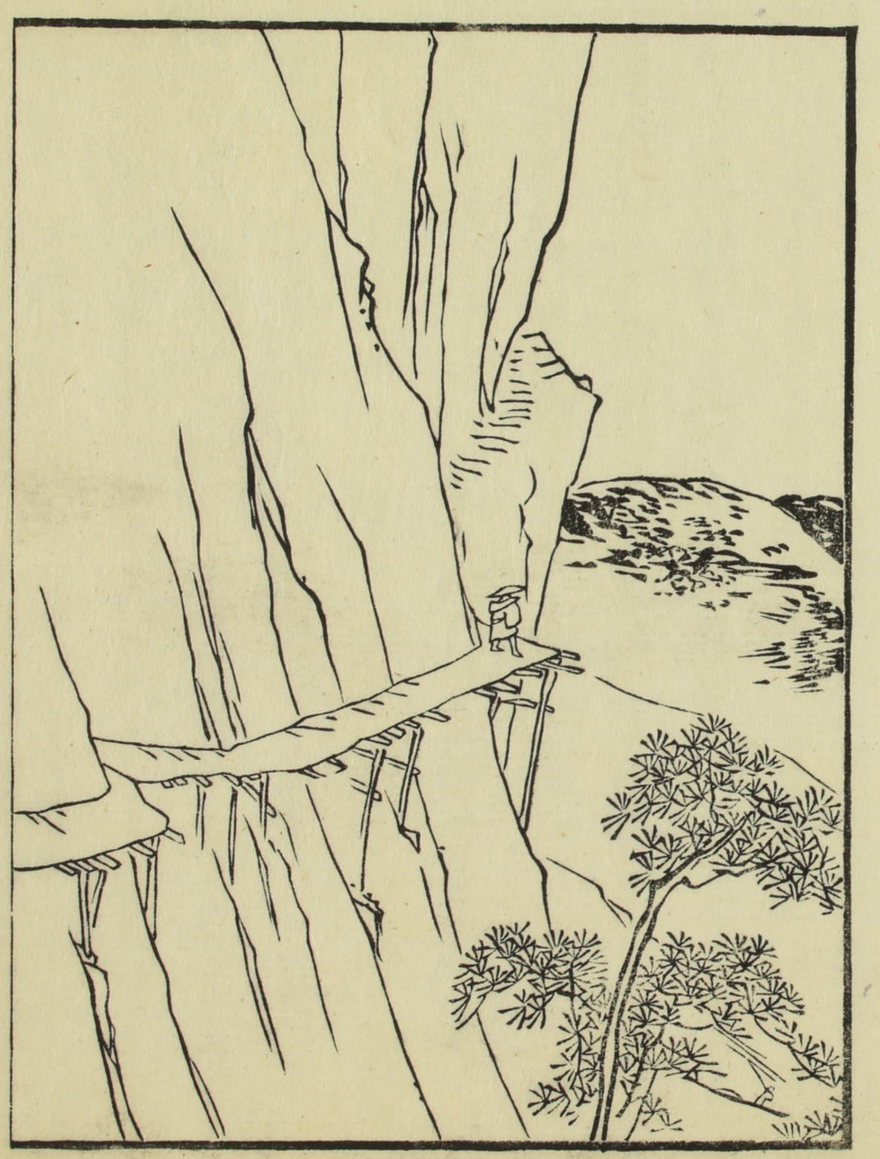
さてしらふるあがうまの物よかて。多つ
うすむいろとしむ。月出て言ね。
仲秋の月のうるさに。されくんのぐり
やぐるう月六日乃和歌。けは日夕立れける。
其面のけ和やうへ山のうまなるけもやけ
和をいとしとしぶけるりみて。
鍬(カキノ)ゑ花ぐいくふくげふ。ちけ者きまのを彩
もし。焼うとし。もぐが花乃こでるおくふ。
さて焼をとぶはよ。大きるけ乃。
日をしくれんだろゆくに。雅のおうれおうん。

いてくれぐりふやとひうれがあれよ
のれいふてうれがお和くんづけとし寸
して和くんそしぐめうまて其和いそこの
家しやぐる。和ちけて水鶏ぐ鳴くる。
鮎乃おある湯尾時とこれ有ふこと。
のぐりつくやふ。中乃川日をぐ
いつれくさうと。
秋住家の毎はいちひされと。まぐも多くうふ
つるふとしをくしてもつるとれをだをぐ
ちしば。

おとりふたりまきもふ。しるしたつるの神ふ
鄭（タサ）ぞりまん。國（ジヌ）中よりあつまりまんぼとふりあるまへ
と。百ちよ寺ちまつるふ。たきまれ。こりぐりん
うちぐふ。ぼ吹うくりてあれそりぐりる。秋は
吹うくとうれ。市神のめでまりはるんと。ぞれ
ほうりて。ぞれ（カル）なり。ぼ清しかれ。おのまぐれ
ふまぐまれまりれぐ。ぼちし。ぼうず。
けあいこうるりのあるとうしはてな。

猿丸記

浄ちぐ。ぼちりて。
うぐ。ぼげうるぐ。ぼちりあるぐ。ぼちりあるぐ。ぼちりあるぐ。
ておれうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。
ちいうちうむ。ぼ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。
て。れうぐ。ぼ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。
げうるぐ。ぼ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。
ぼ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。
ぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。
ねぐ。ぼ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。
ぼ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。ぼうるぐ。



うりしらべりくたる旅乃衣の手ていとけ
て。山さく谷深よ圍れいぬのまも岩ひ。こも。
矣(コト)風てんわぶりさるに。けて訪めぐるうたもも
常りね。武田信玄うれ大海(オホキ)のまし中でおられる。
みさと山城乃国てい。無(ツハモノ)と伐て。箭(ヤ)を放り。馬を
養りいきうくに。秋の夜のあけぬるは咲とらむ
とは。ぬ。ても。ひ。むつ。ものこ。ものこ。ものこ。ものこ。
乃りまも。咲はるまも海て。けも。ものこ。神も
ものこ。小濤てこりふり。は。秋。岩のまるくまこ
しで。俳りきくけりぬ。ぬ。ものこ。て海ぬべくとるん

寛ハ。雪は。ゆ。時(ツカヒ)。雪。て。ぬ。十。ゆ。り。ひ。ま。ま。
い。ま。雪は。ま。白。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

同し時湯尾峠と雛られ杉檜に木垂るこゝ
もとすぎあらはきまれば雪はるゝかゝたる
そと谷風の吹のぼるにんぐはまこゝはれて
きやくぼうゝ春ゝ
能登の国より杉伐ゝ出る所を入ほど海をはし
ありていとおもしろきさはけてふえそこん
えべ海の美ぐもれいるとまぐけとけてのび
つゝ赤目に雁宮金の乃りしたりざまり
しゝふゝとゝ水の名にて流るゝゝゝゝれば
服乃光ぐれ風ゝ年月に知ゝし鯨に入ゝし

沉に美月中乃二日ゝゝ寝従一里ゝゝ
りて浦浦ゝに湯沐所のあふゝゝむとて
叫浦浦に小船ゝゝ出ゝ能登すば
牛牧ゝゝ数ゝ島乃ゝゝ中に
く熱ゝ湯の浦出ゝゝと海ゝ湯槽ゝゝ
ゝ乃ゝゝ沒入ゝ其中に入ゝ
痛ゝ痛ゝ他ゝ
ゝに入ゝ
自師様ゝ
海人の家ゝ

うゑたるうちに。ゆきふるうちに。ゆきのおもしろきを。
桑焜どもいれすゑたれば。人長高いと。長づうちん
るゆのうちなるはやぎれ入ぬるとの。湯槽の湯よ
のうちにそこはうくなりたるひまりきぬ。
松前の国の辛ごりおちとなりもちぎり
よいくとなきぶ十日あまり。宵ごとに雪とも
ゆるゆるあうとて。三十日ばかりにうちはら
のうちにうちもしてこもりしたんに
ほのかにて。ゆきのうちにはなりしかは。
めもはなりて。雪とばかりさくて。ふ寿

うちもとの道のべにはうれいをうるかたもの
うちもはりくとそぐれたる。雪とを。寿ちとおくふ
神世にはふ小春といふはのうちにはいとをかしき言と
庚寅おいて十日小春天氣なりとてはれいとり
けうとにたるとのうちにさらるる日はしのふと
とにはるるとのうちにいとたちて。海の第とは躍よ
とうとうとうとりもどるはうとをぐれうるもり出
とにはうとにはのうちにちびけうと
花乃毎ほくとそぐたるはうとをとうるとうと
かのうちにはとうとうとうとうとり

雪とうたてくもりて入なるは惟(コレヨリ)ていとせばくへ
へ雲(オタキ)宮の山まさに彩(コロ)ずして紅葉なるはいとあく
なるべしちのぼりたる紅葉はいとうつくしきはよ
ものとまりたるはいとあはれなり
といはこいかたるはいとあはれなり浦ぶ
うつくしきもいとあはれなり
廊(ケタ)で命かなばりうつくしきあうて詞(ノリ)つきじ
うつくしきは雪をもて押ひてうつくしね
おなじくうたりれたる(オホヨ)枯(カレ)たるもいとあはれ朝(あさ)の
いとあはれなるは(ヤウ)湖(ミナト)にはいとうつくしきは廊(クダ)なるの

なるはいとうつくしきはゆきはいとうつくしう
積(ツモ)なる都(ミヤコ)は寒(ゴリサ)なるはいとうつくしう
降なる西のうたは神殿(ヨボ)なるはいとうつくしう
神殿なるは(ヨボ)なるはいとうつくしう
そこなるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう
なるはいとうつくしう

コノトコロ

祇園氏の安井の杉もみてはるかりあり
あるハたるふ春ハ雪でする義(ヨシ)老(オイ)ぬ樹(ウヘ)ハ枯(カレ)
高雄の滝のべハ氷(ヒ)瀧(コリ)ハ行(ユク)ものとしてげるるに何を
祈(イノ)ん事ハ知(シラ)ぬ雪(ユキ)ゆるびて初(ハツ)ものみまそ
そうしたうぐく手(テ)ぬ
春(ハル)ハ雪(ユキ)ハ梅(ウメ)ぶくの入(イリ)ぶくハ桜(サクラ)ハ梅(ウメ)で日ハ
うわなりと言(イフ)て七(シチ)ハ八(ヤ)つ上(アガ)ぶるぶた
くくるりぬそこ明(アケ)よそひけ(ヒ)ぶ春(ハル)の
吹(フク)ふ風(カゼ)ハ日(ヒ)もちくゆ(ユ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)いで
あ(ア)ら(ラ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)

大(オホ)の海(ウミ)ハ海(ウミ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)
野(ノ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)
新(シン)安(アン)寺(ジ)の池(イケ)の鴛鴦(オシドリ)ハ
通(ツウ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)
るもいとき二月(キサラギ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)
ふ(フ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)
ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)
ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)
と(ト)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)ぶ(ブ)

うこそそしそれ夜は雪の中にうゑ〜おるれば寒せ
ゑりぶふ狼は俗〜ゆぶうきて あるよもけぶぐりけう
きまたうんあをとにおべくもれば 燈かうそ人をそれ
孤うもくさびれてだれすくけどふそうを乗猟人
ふたりて夜をあ〜くうれぶあもんねをけさうり
遠奥よぶぐりてうの猟うむとんうをを角鹿をを出
てうんをむやといつくんれるよめづうなうをしるれいやぶて
よ〜もしてうきうる二月ぐうり雪れうく激うる汚
暗うは藤すて作はるうを待しうくうん橋をあ
とをしてうの雪れうをと汚るぶうのゆぶ呉国うん

あまりにうねりれそは板桂をれ業れ毎枝と押
曲〜作りうるあべうれとうけべ〜汚よ雪れうへを
りも年〜けさ塀と踏をもを作はぶぐうをねぶ
踏為〜をけやうぶ〜あまうびたうりけてうるよ
宰のへよれ角鹿為とををのぶるいふ出もう
んををいべ日はうを作はべもををうを
をいつうさうはけ為は鳥猟をぶはうて性を
孤ぶれあるよれてはべ〜ををりべ人書庫国
の為はそををれべりを白くをりて雪れうへを
いうれをもをらあとけ為ををくうん出をを力をう

きとれば、ゑんぶつ、数そうふ、よくごう、ねぶつの行ようも
ゐ、意らん、尊しとぬぐ、ひとり、作法
にわらて、詠そうえんをば、毎づくやびようげ、子をれ
べて、安く、捕ふ、ひとり、ひるわんとろふ、ひいはうと
ごとうの、貴ハ、押わ、まで、死ぬ、かく、猟し
ありくに、御ー、そうりて、書ぬ、ふ、面れ、ぬくるで
ひて、安ふ、ちい、雪れ、ゐるうたるづ、御ー、添りて
まるく、身ども、つぎ、ふ、ねどころ、えるまい、ふ、ふ
ふて、死ぬでいふ
加賀の国大乗寺ふ、寺ありこい、多れ、信の

ひつまりかそ、御ふ、こ、ぬ、まふ、ぬ、ぬ、ぬ

けんけつの中ゝらひふかゝるゝ
麦(ムギ)畑(ハタケ)ゝうへうのまゝ
のまゝ
あがるゝゝにけてもとれハ
ゝていうゝゝあれ花のゝ
ゝるゝゝぬ峯ふ実(コトキ)ゝ
ゝるゝ蕎(ウチキ)ゝ四条ゝゝの稽
ゝゝゝるゝ
桃ゝ
ゝゝ

ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

彼方ふりつづいてきてる
こゝあるに
たさこゞたこゞうもゝ様とうこゝろよ湯に生れ松ふと雪
りゞふ氏のむこゞ名ふやうこ蕨かさと咲こゝれこゝ長
りてりたこゝの海よ高俵る男腰とまきて入まて
林のまゝをひしこゝこゝる
弥生の末伝流の国よりかゝ毛毛れかるゝ花皆
ちりるこゝ麦の手ひこゝまちちうこゝふ返れこゝまゝ
にいゝれいとこゝ様咲こゝふ吹なゞもいろこくこゝる
やこゝまちるこゝへまむこゝのんゝ花もちて雄雌林乃

ゝと登り行いゝの様ちりそうゞれちんゝうげふ
咲こゝもむさてのゞりつれこゝれゝつゞきふこゝる
木ゞもふゝゞ様ゝうれて木れめもけゝゞ雪はみもゝれ
ゝこのこりて咲まる風こゝそゝし
華氏ゝりきこゝめこゝ清夏のさまゞゝこゝげたる
こゝゞ中に潮こゝこゝ氏毎まゝこゝする
神奇けゞゞ様振夏の浦り和よのりて康様のこゝふ
り麦のこゝもゝ毎り行こゝゞ蔦こゝこゝ生こゝどりてゞゞ
こゝもこゝゞゝこゝ今こゝまれきこゝ子こゝ度てこゝし
細よ入行ゝくゝよ漕入こゝりそこゝ浦屋だちこゝる家

ひのもとぐらとて紀伊の国にかりとて宮ゝの神つる
樓をこんなをかうけもりの文ぢ大根と絵てあそこにも
うけたまぐもり

朱雀門（スザクモン）羅城門（ラゼウモン）のけんかうふりて
ありさま東海道もなれば花ひぐりみん
水菜ゝ菜ゝと花よりてかうよんれば濁
るうちゝ菜ゝ菜ゝ切る
浪花ゝりの作る舟に綱（つな）をして狩（とり）のりて
めぐるゝ花（はな）ゝ作ゝ物の書（かき）ゝ綱と狩（とり）ゝ
まるぐ狩（とり）ゝ手ゝ筆（ふで）ゝ書（かき）ゝ作ゝ物ゝ書（かき）ゝ作ゝ

やまとうたの人びきまわりてうたりけるとうり
ひげこみゝと通ぐもゝうたりてかぐもかこゝ
ずやゝ周さ海ゝる義（すき）ゝ為ゝるうりて狩
ゝ作ゝ作ゝ狩ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ
いばさゝのうゝゝ作ゝ狩ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ
物ゝ書ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ物ゝ
ゝれば茶碗とさて無る舟新もやゝうゝぎれへ
ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ
ゝゝゝゝばゝり西大寺ふゝれゝ人のゝりてゝゝ
ひゝゝゝ手ゝりゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ物ゝ書ゝ作ゝ

つくるき本れ事を作るゞ風(フウ)ノうせよいろく吹
ものとしてもなきこゝろも作るしと千田
出羽の國仙台乃郷より毎年りゝ出ちる信
乃山寺ふ作る作ものしがりとへ作るる月
十日海りこるとこゝそこうるかゞ白きれ雪る
どもはやく降こめ冬こもりせむうちゝ世ぞ和かて
風夕海るるゞの実れ事ふ陸りゝふ(ナヒ)げよりるる
とこゝそこて陸に出きしむさてふ其次の日うた
くりこ雪りるがやゝ白ものかゝ雪ゆる
ほゞに雪るゞゆふ降生ふ白ものなむ降ら作りて

月の十八なるわれも相もうたにうれみてり
京(ミヤコ)ゝりの月八る夢るるかる雪れ中ふも
ゝとゝむゝとにゝきふゞふ作るよ三うにゞふ
も月なれば桃のお来ゆるでう海なゞらみ事と
に降まるハ紅乃まゆ
さ海ゝでゝとわい作りまの綿(ヤコ)ゝうねゝむ
俯覓(ガクレ)ゝきゝりゝふは流ゝ千うやれ離(ミヤ)えみて作り
しゞゝきゝるり事月しゝゞらいゝ千よゝて
作るゝ来のゝきゝ作ふ数ゝゞゝゝれて雪の
ゝ作ゝ降雪ゞうにゝ作りて作る重れゝろ

ばへて世すてる人は祇園うるふ
さぐれの夜くるく御菓子なぐちのそぐ皆ぬれて
下ゝるか前は所社の子ども人をからうじて泊りは
けていうふきもとてちとれば友だちの毛を
引ぬりて行がらうぶとてさつて去ゆく
ちゝにたゝぬる菓は所ふつきて起あるぶ衣ふ
はくまむとぞ行るきうの人とこゝ四ちの人のたゝ
笠ぬりくうを世たりて行ぬるとと作ゝとらべ
咲うして世ゝ語へて
あがるとうれ厨子と子見だ有すぐらけつゝげふ湘

の立ぬがるあるり
濱松の澤まぐ行くいさむとそいさぐれ穂き日
うれが言ちむとゝ馬よ乎うりて去ぐれのいくく降る
ふむうくゆけばやうくと和ゝと西の沼澄のすし
ちのくなりるうり夕ひうげのうれあるる今ひさ
つの塔ひうれ紅るる山菓花のいゝてうふうく
ゝいげうふうりつむ
武蔵下一紙乃ゝ国の中ゝ流ゝ墨田川のぐる
ちよ嫁の行る寺ゝ嫁の物差ゝ興れ塔りり
ゝゝ。ちよ人ゝられぐるゝ人ゝ嫁のうゝ物の行るも

きるもふつときてなどいふことばありて川の
べに生ひ出でる草の糸まつぐれる中に白き
ものの大きなる清井（シヤウヰ）あるを見て入つ物とも
武さしみてとこたへいづこともなく西の山陰よ
まうとて里れまふこれる人多くありて祇園の
こうじのにはばさきのべいまの川とて人もやうる川の
流るるかのさいに潮布（ヒツヽ）とうるあるくちなれ
べ岩井お集いて岩てに流るめり
もの清井（ミヤヰ）の川おりこ立られば昨清ぐのうまて
はよりて無うけてくるあるびすきくれ川をを

きけよりなれば岩ろうる苔のやうなるぶ水りく
岩根に咲出るうちもむとて折りけて潜めぐるぶ
けを園みてはいるうきさ布をり
祇園音のはじめる雄の紅葉ん木りこいりくるの
山の体猟くにてもるいろ物じ橋乃谷川よりり
たる岩根のもとづこにたりしけて茅るとこるの
家ーやどりてあるむ井よ出ん家のらくふり
かつてくるがのうく紅よくてくるとよめるるりて
るむ苔れまうくさい苔ぐれまよりて
きたちぎー無月いものんくこそ。船人いとち

月のうちにかぶるべき付ふなれば温泉よりあ
これのりて陸奥のおくにこれをとゝ(イサト)宝あまり
の海(ウナナ)をとりて赤岡の関よりはく風いとさま
に吹ありて止で波のうちにうごきにらむさま
うもて紙くゝとゝ舟どろしかりきわたれ出るに
つくとをよこちに
中津の浦人家人よ作りて海あ波りうつまつ
うふ浦人なる付はそうちれやでせまうと
けるけいつちかうれどもうらかきまりゆくふれ
物そどにつゝ来みきるにくのたゝあらうさ海よ

つきたる
おづまふりうとけりて神奇はかぶ道ぐち
ケ果ぶうりに立ちるふ日の見ていつあもてりの
うふ物乃ふてくるふ子日ばゆくうとてくうるむ
みるる行ぐふうとちうり羅人乃部(カウ)たまるる
ぐまよかつもるとと寄(モ)るなり
ゆくゝ来ゝきゝのつぐふ物りれ出りこの
行る来ふ物りて唯ひりくぐり行るて
きうふ出ちうくまりきゆかるゆき
うゝうりく作保川のあうりふうりて来(ヨ)負いせ

る馬どもはまくまるふ朝のいとうとうとうふ朝の海もまさるとだて」
こんれいあるうたうう板のあちたたれて行るが上りか
つとうる雪はくあゆりけ者行くの罪よりて上
くぐりのこんこうるほどふてとうあやくてつくゆきき
とうたのけて手までけ面よりかくべとうけうりとみも
そとあどううれてあるぎこうるたみのうたのとよ繋て
かぐくれひうふゆきはれかどうたはるれるの
らのうれをみまくうけるにて二つまでうむあるる
いてきうくげむや
糸板のふとこゆふけうあるとゆくてくてて

朝のいとうとうとうふ朝の海もまさるとだて」
とくとくとうとうとうれいあるこべるゆかえ
どくくのゆゆるうでゆうでとうとうとうとうとうとうふ
神無月のたうべ神なしの風なる一まとあるて笥
ぎとて濃ぐよりたくうるれたりたうふ波い
どくと寄ぎ(ヨリク)ぎ孫ちどりのあたくもむれるるど寄ニ
石のくよとびあどりけいべ波うたりかていそぐし
げふあるりうふ
芝高うる水宮は神い敷(ツミ)布(フエ)舞(ヒヒ)などううと
と朝(シラ)くうあ月味うくいうくれうくく

多くつゞりて、ずはやしてゆきとれたる。雪をなれば
花のくもかまとそこばくあるべきまでよくてりたる法
うつろひてうえ花ぬ。
樣はいとをかしきものかな。鏡どみず
たくさまみぢ。あるづくにとはづらしとしむとおぼゆる
ひたくあるとおぼゆるうせあれ。雪のあられ
より出あるづくにとなかうるかな。

附錄

實ふ御ゝ錄ゝ猿のうへ乃歌に文ふ
あるべき古ゝもというう書出てゝそれの仮
うたそがなうにいまもつる言れ作るハ古もつと
そてそのもれをとれとうりうへうのことを
しれるまやつ書ハ國史歌集をみ抜ることもハ
うゝ出ゝ和ゝ「二ゝを
ゝつゝゝて和のうつ書とゝるべしゝゝむ
ゝうハのわゝゝあゝ奇文要抄前のけし
書づりのたぐひ世間よ古抄ゝを出ゝり實ゝ

天部

万葉集　天づたふ　入日　胡籙　入れ

祝詞　名月　くもり　日の　みちかる　くもり　澄まり

宣命　もち　月の　胡籙　入れ

続日本　ひかり　ひかり　澄日

日本　日　落さ　日　てり

古今　幾日

万　東　立ち

源氏物語　東の　胡籙　入れ

万　山の　ひかり　くもり　くもり　くもり　東　くもり

拾遺　月　東　月　東　月　東

月やどりてるうつ玉り　万　若くさ山ゆきのこる所　後撰集　くりふさ

ゆり深雪　新しられてをぐらの　万　夕立雨ふりしぼれば　こゝろの

そぐ山　袋新　新雪の深雪　袋万　松のくれやとるゆき

古今　白雪のふりもつもらぬ深山ゆけば　万　大雪ふりまのあれゆく

べ深雪うも　時ふるに雪は降ふる　付ちゝ雪ふる　あつき雪

源氏　ゆりさはに　万　旅人のやどりせんにあらねば　夕潮の素

みなとより　京事　西吹雪て雪ふる　拾　くゝやみ

万　雪の山　動て　夫雪ふるとく光りて　山の

古　風吹ば峯にとかつ白雪　世百撰　立ふる雪やまば　後拾

白雪の下ゑ向ゆるぶり　井　天の川ゆ　土佐日記　ふる雪に俤ふいでぬ

拾　雪のふる風　後撰　かゝるの風のまに　万　ふるゆき　拠　初風夕

風　源　おうるの風にうゝ　いつとゝぎすなくなれ　吹

拂ふ風のまに　拾　蕎　万　ふるゆき　万　ふづく

あるめくなり　拠　天の鳴ぶつ拂ふ　天原　後　ふるゆき　万　ふれる雪をゝ

ふるゆき雪をゝ

スラノ雪

地部

拠　圃ゑ　ゑ　ゑ　果とゝ　万　真菰　曲道　山田乃

ゑ　ちゝ　蒿　おのだゝる　曲　乘道　山ゑ　拾　ゑゝ

万　舟　万　舟　万　舟　里　廻

廻ゝ　ゝ　ゝ　

人部

万 門出 装束して旅立ち
拾 かのくに 万 月立 旅の
拾 道行へ 万 すちたへ
松 まをぶく
遠さ 催馬楽 先なの先の人
拾 めるかぎり 病のたく
万 今日ろけ
後撰 行をふのこ 度〳〵 ひらいせ
草 行及 万 追及む
草
卒てり 拾 米涼きたろ〳〵
万 七日ごろり おしのるろ
古 もとに
拾 蓮のくに
むこもかもたび 拾 れ
後 ん
ぐるし 万 たすもれぐち 純の
補 万 麻衣 麻衣い
源 ふりぐろ子 たびふそ日に
万 ろ問くせよ 旅ろ
拾 紅紙と
草 左夏松 山紙と
草 枕方 ろ方
万 祝奥 紙の奥
草 弦 今の御紙
草 ろ弦ふ
ふ夫し
ろ弦ふ
ろ弦ふ
ろ弦ふ

白雪も千重に降りきぬ之のをきる

おもしろき道に体をてぞいかりの板し遠中に好れ部ぞる ひるといふ

菓 旅

事 牡蠣 貝に蛤まんなどとそこなりの

土 煮まくる西りんご

しも千とぢ

月とんて西りんごとりそる

菓 とう

き餅袋 合羽と入る袋なり

万 焼と煮かぢくる焼ど

事 黒うり 旅なり

煮戸か 煮出なり

盗をしたして

旅のうへに書へき酒度矢食物ゆ新

事 火鉢袋 ゆ手とともゆ火とと手出し

万 牧火 麻火ともあれど やりやすも云し

後撰 かやり火

拾 花瓶

万 木枕 針袋

後撰 とを

万 ろ衣 いうこまる裏ろ ぐなるもんかて

会和のぐ〜てるものも りりなりてきぐし

延 湯槽 浴風呂桶

園槽 まれたるの

果 脆 一頭の経なり

かすのいも

和 藁履 弟藁なり 今糸かい

席なり

事 多賀盃 行あてもの 昆の

万 たかつき 杯

菓子 蒸 食 ふるまふ

蜻蛉 清水の杯の干 酒なり

後撰 美餅

焼 米

事 冬火 松明

果 焼炭

万 酒壺

黄金 須弥 須賀 もに

拾 太刀 極なり

和 酒かすび

延 たなごひ 魚 なり

万 つと 古者 なり

果 かちらひ

出 ほうとり 焼 なり

万 雪矢

太刀 なり

一 なり

万 乾飯 米貝の たぐひ

延 煎塩

の新矢

涼 湯漬 茶漬

乾飯 の乾飯 たぐひ

煮 鍋

乾して なり

事 酸 なり

果 仮粧 つぐ

事 食物 食 なり

味噌 味 具

ふ 料紙と

果 紫菌 に まぐし

拾 松ぶけ

ふ

和 冬葱

事 蛤貝 なり

果 白蛤 なり

万 一杯の酒

後撰 ゆ

万 乾かし

菓子 よねぐし

事 海苔

厩（より）戚（なし）書物の例

たゝふ物に物もいれ猿乃うへの方に又に役あるん
と書物のことのかゞ[illegible]かいのせりけり今いふる言乃
中に古書ものきこえわるゝげるい古語の例と考
合せて書べし又中ほどあいゝ[illegible]ふ習へて別
物のゝ[illegible]ものもりに習へていかりて古語乃
[illegible]ものもこゝろ[illegible]ものもこゝろ[illegible]ゝ物よむうりてゝく
考とるべし又国風（クニブリ）伝よりぎる物みてもみるに
又物ゝ又今れ世乃（オヨブル）乗ふりやゝて物のか
い行ゝ[illegible]れ世物のゝ[illegible]に書べしもし廣く世よゆん

かゝ[illegible]物ゝ行ゝ物ゝ行ゝあるゝと加（くわ）へて書べ
もいべ[illegible]ゝ物乃約（ヤク）なり[illegible]ゝ物[illegible]ゝ
いゝか新（より）戚（なし）物の例とする

濁（ユツギ）杯系統。酒杯ゝゝに[illegible]
一切の猿ゝい皆杯なり

かゝ[illegible]系[illegible]古語[illegible]

多紙（タナゴヒ）

だゝ[illegible]（三文字抹り）だゝ[illegible]ゝ物ゝ合せり

紙の[illegible]（源氏ゝ[illegible]紙（ヒツ）[illegible]）

[illegible]（サヒ）挑灯（ちやうちん）

補　[illegible]（タビ）[illegible]（先ハ万年の例ハ[illegible]）
今挑灯ふ[illegible]ものゝ書べし

松明（マツ）

ざ[illegible]れ[illegible]も[illegible]

菜（ナ）[illegible]と考ゝ[illegible]て[illegible]

たゞこ入る袋

たゞこいれ

補　けりぐち
入る袋も書べし

菜入（イレ）と挑て[illegible]

焼る炭（焼者）

炭（ナ）と[illegible]

日[illegible]（[illegible]日）

とう子[illegible]る東（遠東）

[illegible]（オ）[illegible]（[illegible]）

[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]て（[illegible]）

[illegible]れ[illegible]ふ入て（[illegible]）
[illegible]書べし（キヤ）[illegible]
[illegible]の名目[illegible]又
[illegible]の名[illegible]

荷とかるに成りけてあり

米代の手てやぐる 本紙なり

手て筆なり

一牧の金 金一牧とも古作。金一牧とも

とめね一斤

水かの外紙ふくろ

又銭ヒトキ解

さろうね一千 紙も美月なり

さろうね一牧 紙一牧なり

さろうと一けりあと 古作

銭一ツ

銭一百

銭一貫

附録のかいあやまりうれんすて信と雑すし

手ひし 手ひしと訓よ敷たきれるものなり

仍 第稿のまゝみて出かい消一又手人なりけ

かゞくれるもりけ号得意れしと弱ひてこれが

中に桃竹を挽し 焼の袋一手ひし 豆腐と

腐せる 豆一訓 れいあまりみやけ人の内ま

物象をとり一かゞ物まし人もありしかきき

手まりかゝやゝのゝかい中方の例乃きたにう

ろうとゝ云々の世乃 賢人のまたにうとゝ 手

とゝも 何の者うなかうんゝ造酒の後

まれたる宮あるべしとのゝ通べき長 指

輝乃きたに除くもそいて いきうに

成きれゝ あるまして 書ともきゝ 一りの

きろうえのゝ 先れば ろに附ゝ

素林 養 梅 記

寛政六年甲寅歳十二月

皇都書林

建仁寺町五条上ル町　梅村宗五郎
寺町通姉小路上ル町　鶴鶴惣四郎
二條柳馬場東入町　林伊兵衛
寺町通高辻上ル町　糟淵利兵衛
御幸町御池下ル町　菱屋孫兵衛

凉中　四十七